厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
小児がん領域における療養支援職種の育成と心理社会的支援多職種ガイド開発に向けた研究
分担研究報告書 令和6年度

小児病棟で活動する心理専門職の活動と子どもの療養を支援する専門職との連携
～ 小児がん病棟にかかわる心理職のインタビュー調査を通して　～

研究分担者　永田雅子　名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授

研究要旨：本研究は、小児医療領域で活動する心理職の役割を検討し、現在の小児科病棟に関連する活動の実際を把握することで、他職種との連携について検討することを目的とした。CLSなど療養支援を担う職種等が配置されている小児病棟で活動をする心理職を対象としてインタビュー調査を実施し、小児科病棟における心理職の専門性及びCLS等療養を支援する専門職との連携と課題を明らかにした。

A.　研究目的

近年，小児科における心理職の活動は外来のみに留まらず，病棟や集中治療室にも広がってきている。一方で病棟での活動の課題や連携の難しさもみられており，CLS(Child Life Specialist) や HPS (Hospital Play Specialist) 等の療養支援の職種と協働している場合には，その連携の在り方や職種の専門性における周囲への理解について課題があることが示されている （春日部ら,2024)。そこで本研究では，小児科病棟で心理職が介入をすることが多い小児がん領域に焦点をあて，小児科病棟における心理職の活動,入院患児･家族への関わり，多職種連携について明らかにすることを目的としてインタビュー調査を実施した。

B.　研究方法

CLS など療養支援を担う職種等が配置されている小児科病棟で活動する臨床心理士/公認心理師を対象とした。小児科で活動する心理職の職能団体を通して研究参加者を募り，最終的に全国の総合病院あるいは小児専門病院で勤務する6名の心理職から協力を得た。インタビューガイドをもとに小児がん領域における心理職としての活動について半構造化面接を実施し，修正版グランデッドセオリーアプローチ（M-GTA）を用いて分析を行った。

なお研究は所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：24-2277）。

C.研究結果

1)　基本情報

研究協力者の 6 名全員が臨床心理士/公認心理師の資格を有していた。下記に中央値（範囲）を記す。臨床心理士歴は19年（5年～24年），小児がん領域での勤務年数は7.5年 （3年～11年），常勤5名 （83.3%），全科対応が2名 （33.3%），小児科領域のみが4名 （66.7%） であった。CLS/HPS がいると答えたのは4名 （66.7%） であり，病棟保育士がいると答えたのは4名 （66.7%） であった。

2) 心理職の活動の形態と果たしている役割

多職種でのカンファレンスはすべての病院で行われており，チームによる介入が行われていた。心理職の病棟での小児がん患者とのかかわりの形態は，主治医からの依頼2名 （33.3%），病棟ラウンドの実施と主治医からの依頼の両方であると回答したのは4名 （66.7%） であった。病状や経過に応じて全例を対象として介入を行っている病院もあったが，病院の体制によっても異なっていた。全例介入以外の心理職が関わった全体の症例割合は小児がん入院数の 57.5% （6%～65%） であったが，病

院によって関わりのきっかけが異なっており，家族のニードだけではなく医療者の不安や定期的な病棟ラウンドが契機となる場合も存在していた。心理職の果たしている役割を3つ提示してもらったところ，患児の支援，家族の支援,スタッフの支援（家族と医療者の仲介も含む）は全例が行っておりアセスメント（見立て）と回答した人が2名存在していた。

3)小児がん領域における心理職の専門性および職種間の連携

インタビュー結果から共通したカテゴリーを抽出し、概念化をおこなったところ、以下の結果を得ることができた（図1）。心理職の小児病棟での活動は，カンファレンスやカルテによる「情報共有の在り方」と，他職種の専門性の理解・尊重と職種間の調整といった「職種間での役割分担」が＜他職種との連携の基盤＞となっており，同時に＜他職種との連携の課題＞ともなっていた。また＜小児がん領域の心理臨床の特殊性＞として身体治療が優先され，病状・経過の影響を受けるといった「医療現場特有の不確実性」と，家族や本人のニーズが明確ではなく，時間や場所など支援の枠組みが揺らぎやすいといった「心理臨床の枠組みの曖昧さ」が存在していた。患児の意思を尊重し，成長する存在としてみるなど「本人の主体性を尊重」すること，医療には直接かかわらず，病気以外の日常に目をむけた「全人的視点のかかわり」をすること，時間や枠組みのある面接とベッドサイド面接，病状などに応じたかかわりなど，心理的アセスメントを踏まえた「個別性に応じた柔軟な支援」が、＜小児がん領域での心理職の専門性の発揮＞につながっていることが示された。CLS等療養支援を専門とする職種との共通性および専門性の違いについては、「患児や家族の話を聞く」「こころのケア」を行うことは共通しているものの、「時間と枠組みのある面接」を行うこと、「治療に直接携わったり、身体的なかかわりをしない」こと、「病状を踏まえて発達や精神症状に関連した相談に対応する」ことが専門性の違いとして明らかになった。

D. 考察

身体科における心理的ケアは他の職種も担っており，話を聞く，患者・家族へ声をかけるといった点では共通しているものの，心理職としての一定の枠組みをもったかかわりをおこなうことで専門性が発揮されていると考えられた。CLS/HPS 等がいる病院といない病院では，他職種との役割分担や協働の在り方が異なっている可能性があり，今後，詳細な分析を行っていく必要がある。

E. 結論

小児がん領域で活動する心理職のインタビュー調査から、心理職は、心理アセスメントを基盤として、他職種と連携をし、患児・家族の個別性に応じた柔軟な支援をおこなうことで、専門性を発揮した活動を行っていることが明らかになった。

F. 研究発表

１．論文発表

なし

２．学会発表

鶴田裕子・三谷真優・高橋久美・守村麻子・水島みゆき・丹羽早智子・永田雅子　小児がん領域における心理職の役割と多職種連携　-心理職の介入と関わりに焦点をあてて-　日本心理臨床学会第44回大会　2025．9（予定）

G. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

研究協力者：
高橋久美（名古屋医療センター小児科　公認心理師）
丹羽早智子（日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院精神科　公認心理師）
水島みゆき（静岡県立こども病院　公認心理師）
守村麻子（愛知保健医療総合センター　公認心理師）
鶴田裕子（名古屋大学心の発達支援研究実践センター研究員）

三谷真優（名古屋大学心の発達支援研究実践センター特任助教）

図１　小児がんを対象とした病棟での心理職のかかわり

